

『日常』

セイラ

両親が三日間の旅行に出かけた後、僕と姉ちゃんは、家で留守番だった。このときは丁度夏休みで、何もすることのない、ただ暑い日中を、テレビを見ながら過ごしていた。

ブルルルルッ。家の電話が鳴る。

「姉ちゃん、電話」

僕は床に寝そべる姉ちゃんに声をかけ、自分の部屋に戻る。

「ハル、ちょっときて」 姉ちゃんぶ、ハルというのは僕のあだ名だ。名前が春だから、ハル。「どうしたの

軽い足取りで家の階段を降りる。「お父さんとお母さん、死んだってさ」

それから一ヶ月、姉ちゃんはすっかり変わってしまった。食事も日課の運動も、いつものようにこなす。けれど、前とは明らかに元気がない。両親は車で移動中、後ろから大型車に突っ込まれて死んだそうだ。原因は相手のわき見運

手続きやら葬式やらで残り少ない夏休みを使い果たし、学校が始まった。姉ちゃんは夏休み明けからずっと学校を休んでいる。無理もない話だ。

「姉ちゃん、学校行かない?クラスのみんな、心配してたよ」

家の二階、姉ちゃんの部屋はドアに鍵がかかっている。断固として家から出ないぞという意思表示のようだ

「…………ハル、あたしの教室行ったの?」

姉ちゃんと僕は同じ高校だ。姉ちゃんは三年で、僕は一年。

「そりゃあ、プリントとかも受け取らなきゃだし」

「ハルはすごいね。あんなことがあったのに、いつもと変わらない」

「僕だってつらいよ。 でもいつまでもなにもしないじゃあ、お母さん達も心配すると思う

から」

「ハル、そんなこと言えるんだ。あたしはダメだなあ。全然立ち直れないや」
自嘲気味にいう。

「僕だって、立ち直ったわけじゃないよ。 ただ、なにもしないより気が紛れるから」

「気が紛れる、 か」

「うん」

「学校、楽しい？」

「姉ちゃん、親みたいだよ」

思わず笑みがこぼれる。

「……そう、だね。 お母さん達がいなくなった今、あたしが親代わりにならないといけないんだよね」

いきなり空気が重くなる。 思いつき地雷踏み抜いた気がする……。

「姉ちゃんはさ、難しく考えすぎなんだと思うよ」

「考えすぎ？」

「そう。姉ちゃんはさ、お母さんとお父さんがいなくなって、僕のことを守らなきゃとか、そういうことばかり考えてると思うんだよ」 なきゃー」

「そ、それはそうでしょ！ あたしはお姉ちゃん、ハルのこと守ら 「僕は、守って貰わないと何もできないほど、弱くはないよ」

突き放すようで、優しい一言。どんな言葉をかけるのが正解なのかはわからないけど、こ

れが一番いいと思った。

「気負いすぎ……って、言いたいなの？」

「まあ、そういうことかな。もちろん、お母さん達のことを忘れろって意味じゃないよ。それしか考えないのはダメってだけ。

姉ちゃん、テニス好きだったでしょ？ そういうのやれば、今より少しはマシになれると思う」

言ってみて、我ながらひどいと思った。今の姉ちゃんがみてられないのは事実だけど、もう少し良い言い回しはあったと思う。

「マシ……ハハッ。確かに今のあたし、ひどいことになってるかも」

「かもね」

ドア越しで顔は見えないけど、姉ちゃんの笑い声を聞くのは久しぶりだ。「そっか……じゃあ明日、学校行ってみようかな……」

こうして、僕達の日常は続いていく。